**在宅復帰・在宅生活支援における家族会の意義**

**～アルボース家族会からの考察とその有効性～**

吉田 拓也[1)]　瀬間 良礎[1)]　大塚 彰太[1)]　美原 恵里[2)]

1)公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 支援相談員

2)公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 施設長

[目的]平成24年度の介護報酬改定において在宅強化型老健施設の施設基準が設けられ、老健が果たすべき機能として在宅復帰・在宅生活支援が明確化された。在宅支援の実現に対し、介護者となる家族への支援は必要不可欠である。家族支援を目的として、当施設では平成9年から家族会を開催している､頻度は年6回､参加家族は平均30世帯､内容は3部構で、1部は座学により家族への啓発、2部は家族の介護体験談、3部は意見交換会となっている。家族会を通して、介護者である家族同士が交流をすることにより、同じ境遇を持つ仲間となり、安心感や不安の解消に繋がっていると思われる。今回、在宅復帰・在宅生活支援に対して、家族会の有効性を調査したので報告する。

[方法]平成22年度から平成25年度（全23回）の期間、家族会に参加した家族を対象に、家族会後にアンケート調査を実施した。アンケート内容は、座学、介護体験談、意見交換会の各セッションの評価、および、家族会で取り上げて欲しい講演内容について、多肢選択・自由記載方式とし、複数回答可とした。

また、平成22年3月～平成26年3月の間に当施設を入所した利用者の家族を対象に、家族会に参加している群（参加群）と参加していない群（不参加群）に分け、在宅復帰率や、リピート率について検討した。

[結果]家族会に参加した家族延べ618人中568人からアンケートを回収した(回収率91.9%)。座学に対する意見・感想で最も多かったのは､｢介護の知識・技術の習得｣226件（53.9%）、次いで｢介護の振り返り｣106件（25.3%）、｢感謝｣38件（9.0%）であった。介護体験談に対しての意見・感想で最も多かったのは｢語り手への感心・共感｣122件（30.0%）であり、次いで｢介護の知識・技術の習得｣103件（25.3%）、｢介護者という同じ境遇を感じられた｣93件（22.9%）であった。意見交換会に対しての意見・感想で最も多かったのは｢仲間の存在への気づき｣116件（34.9%）であり、｢介護の知識・技術の習得｣110件（33.1%）、｢介護への励み｣58件（17.5%）と続いた。家族会で取り上げて欲しい講演内容は、｢自宅でできるリハビリ｣157件（12.1%）、｢認知症｣144件（11.1%）、｢オムツ介助｣121件（9.3%）

などであった。平成22年3月から平成26年3月までに入所した、利用者の実人数は489人であった。このうち、家族会参加群の実人数は181人（37.0%）、在宅復帰率は83.4%、リピーター率は76.2%であった。家族会不参加群の実人数は308人(63.0%)、在宅復帰率は75.0%、リピーター率は56.5%であった。対象とした家族のうち新規家族は308人(63.2%)であり、そのうち、家族会参加群の実人数は、83人（26.9%）、在宅復帰率は69.9%、リピーター率は57.8%であった。家族会不参加群の実人数は、225人(73.1%)、在宅復帰率は、63.6%、リピーター率は41.8%であった。

[考察]アンケートの結果、どのセッションに対しても「介護の知識・技術の習得」という回答が多かった。このことは、家族会に参加することにより家族が介護知識を得て、自身の介護力が向上し、自宅での介護に対する不安の解消に繋がっていると考えられた。介護体験談では、家族は語り手に対して介護者という同じ境遇を感じ、意見交換会で家族同士の交流を通じて仲間意識を持つようになっている。介護をする仲間として互いにアドバイスや愚痴を言える関係をつくり、家族が自ら行っている介護を振り返る機会になっている。今まで、自ら行ってきた介護を他者に認めてもらえる安心感や、一家族では気付かなかった介護方法の工夫も見つけることができる。アンケートの中には、「自宅でできるリハビリ」についての意見が多く、当施設に対する期待が伺えた。

家族会参加群、不参加群を比較すると、家族会参加群の方が在宅復帰率やリピーター率が高く、家族会は在宅介護を支援する上で極めて有効であることが示唆される。すなわち、家族会は、家族の在宅復帰への後押しとなり、共通の境遇を持つ仲間づくりの場となる。また、在宅生活を支援するという老健の役割を果たす上でも重要な機会となっている。

一方、家族会への参加率は37.0%であり、新規者家族の参加者は26.9%と少ない。在宅復帰・在宅生活支援施設としての役割をさらに強化するためには、より多くの利用者家族に家族会への参加を促すことが、在宅復帰・在宅生活支援に結びつく可能性があると考えられる。今後は、家族会の早期からの企画や、アナウンス方法が課題である。

[まとめ]平成22年6月から平成26年3月の間に家族会に参加した家族にアンケート調査を実施した。家族会は、家族にとって介護の知識・技術の習得の場となり、介護仲間を得る機会となる。家族会を開催することは、老健の役割である在宅復帰・在宅生活支援に有用である。